

大田区立尾崎士郎記念館版 記念館ノート



徳島行連絡船にて。左から川端康成、中村武羅夫、尾崎士郎
1930（昭和5）年4月撮影／画像提供・大田区立郷土博物館

徳島日日新報主催の文藝講演会（1930年4月26日開催）で徳島小松島埠頭に到着した3人。このころ、『没落時代』（尾崎士郎主宰、創刊号のみ）や『十三人倶楽部』（中心人物・中村武羅夫）など幾つか同人雑誌の創刊や親睦団体の結成に3人が関わり、以後交流が長く続いた。

第3号

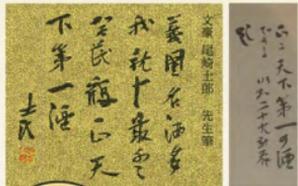
発行：2019年3月31日
編集：大田区立龍子記念館

館のトピック

◆尾崎が最も愛したのも

二〇一八年九月、尾崎士郎記念館書庫に新たな陳列ケースを設置したほか、各展示ケース内の資料を一部入替えました。入替え資料の一つとして、尾崎筆「我愛賀茂鶴（複製）」（一九五四年一月、当館所蔵）を展示しました。「賀茂鶴を飲（たの）んで早くも三十余年が過ぎた。今にして思えば人生の滋味（じみ）は、ここごとくこの酒に凝集している」と書き出し、「正に天下第一の酒である」と絶賛しています。三十年代のころは、尾崎は樽を机に置いて飲みながら原稿を書いたと言っほどの酒豪でした。また、尾崎の交友関係は広く、早稲田大学の後輩には石井泰行（一九三四～二〇一五、賀茂鶴酒造名譽会長）がいました。

一九五八年、賀茂鶴が日本で初めて大吟醸を製造した時には、ラベルに載せる賀茂鶴に依頼しました。「吾国名酒多、我輩中最愛賀茂鶴、正天下第一酒（広島）に名酒は多いが、その中でも私は賀茂鶴を最も好んでいる。まさに天下第一の酒である」との一文は、かつて寄せた「正に天下第一の酒」を漢文調にアレンジしたものでした。現在、賀茂鶴は幅広く親しまれており、大吟醸「双鶴」に尾崎の賀茂鶴を見ることができ、すもみかしたら、酒豪の尾崎にとって最もうれしい依頼が、この一文を任されたのかもかもしれません。



右「我愛賀茂鶴（複製）」（当館所蔵）の末尾部分
左「賀茂鶴」ラベル（部分） 画像提供・賀茂鶴酒造株式会社

2019年度の予定

1. 散策会

○2020年3月20日（金・祝）「馬込文士の足跡をたずねて」文士村散策会
山王草堂記念館などと連携して、馬込文士の旧宅跡やゆかりの場所を散策します。

2. 館内のご案内

○以下の日時に学芸員が付き添いで、普段は入れない館内に入館できます。
4月6日、5月4日、6月1日、7月6日、8月3日、9月7日、10月5日、11月2日、
12月7日、1月4日、2月1日、3月7日すべて土曜14:00～15:00
詳細は大田区報、情報誌「Art Menu」、公式ホームページ等に掲載いたします。

館の基本情報

〔所在地〕

大田区立尾崎士郎記念館
〒143-0023 東京都大田区山王1-36-26
※建物内には、お入りいただけません
TEL 03-3772-0680（龍子記念館内）
URL <http://www.ota-bunka.or.jp/ozaki>

〔アクセス〕

○JR大森駅西口（山王方面）より徒歩10分
○JR大森駅より東急バス「上池上循環内回り」、
「新代田駅前」行乗車「山王二丁目」下車、
徒歩3分

〔入館時間〕

9:00～16:30（入館は16:00まで）
●入館料 無料
●休館日 年末年始・臨時休館

尾崎士郎と川端康成の交友

「出会いから馬込時代まで」

大田区立尾崎士郎記念館担当 去員 黒崎 力弥

はじめに

馬込文土村の中心人物尾崎士郎（一八九一—一九六四）小説家としての足跡は、多くの文士仲間が集った。なかでも、川端康成（一八九九—一九七二）小説家は、尾崎を度々支え、尾崎の親友に値する人物であった。一時疎絶されたことがあったものの、尾崎と川端の交友は生涯続いた。二人の交友関係はどのような経緯で深まったのか、出会いから馬込時代まで多寡する。

一 尾崎と川端の少年時代

尾崎と川端の類似した境遇として、故郷の喪失があった。尾崎は、父と兄の公金横領罪で財産没収となり、故郷、横須賀村を去った。川端は、少年時代に家族を全員失ったことで住いを転々と、故郷を去った。

愛知県横須賀村（現・西尾市吉良町）にあった尾崎家は辰巳屋と号し、雑草の製造や木輪問屋の成功で財を成した。一九〇三年から千郎の父・嘉三郎が三等郵便局制度で政府が郵便制度を浸透させるために、地域の名士に郵便局の開業を依頼した制度によって郵便局長となり、慣れない仕事だったのが、嘉三郎は薬物依存症（註）となり、一九一六年十一月、嘉三郎が六十一歳で暴死（註）すすと、長兄の重郎が跡を継いだ。重郎はもともと高等文官（国家公務員）を目指しており、官僚的気質を多分に持っていた（註3）。従業員数増や期やすなど、二代目として郵便局の運営を軌道に乗せたが、父親が父に手を行っていたことに気づいた。重郎は問題を解決するために父と同様の行いを続け、二代目に渡って使い込まれた額が三万円（現在で約千万円）円となっていました。一九一八年六月、重郎は父の罪を告げることも含め、二十七歳で自死を選り、横須賀を離れて東京豊多摩郡戸塚町（現・新宿区）へ移った。以後、士郎は小説家として大成するまで三十年近く、横須賀村を訪れることはなかった。

一方、川端康成は大田市北区の開業医の家に生まれました。父・栄吉は開業医の傍ら、漢詩や文人画を嗜む趣味人であり、母・ゲン

の実家は財産家として大阪で知られていた。だが、もともと虚弱体質であった栄吉と母・ゲンが相次いでこの世を去り、四歳に満たない康成は、英木町の祖父・八郎と祖母・カネに預けられた。父方の実家は「川端の團堂」と称して、官賃を得て新漢方の開発・製造なども始めたが、三十八歳が大阪市宿久庄に家を建てて、三人暮らしを始め、一九〇六年康成が八歳の頃、カネがこの世を去った。続いて、一九〇九年には康成が四歳道いで、叔母の働き先で暮らしていた祖父がこの世を去ってしまった。一九一四年、康成が十五歳の時、祖父が逝去し、迷い康成は身寄りを失った。そして、康成は一時的に母方の実家へ預けられたものの、すぐに茨木中学校の学生寮で生活を送ることとなり、卒業後も東京の第一高等学校から帝国大学生時代に至るまで、戻るべき故郷を持たず、寄宿生活を送ることになった。

二人はこの頃の経験をもとにした小説をいくつか発表した。後に面識のない二人が、互いの作品を認め合い、意気投合したのは、少年時代に故郷を去った類似した体験があったのではなかろうか。

二 馬込文土村での交友

一九三三年十月、川端が帝国大学生の頃、尾崎の「園夢」を『時評新報』で評価した。このころ、尾崎は小説の仕事が少なく、都新聞の文芸時評等でも収入を得ており、川端はまだ大学生であった。そして、尾崎が本郷に住む川端の下宿まで訪ねると意気投合し生涯の交友が始まった。同年、尾崎は馬込中井に移しはじめ、馬込界隈の生活をぎこちなく営んでいった。さながら呼び寄せたのであった。以後、一時的な転居や疎開などを除き、文士仲間などを除き、文士仲間を最終の棲家とした。



尾崎の整理に携香する川端。尾崎の没後、川端が中心となって、尾崎士郎や疎開などを除き、文士仲間を最終の棲家とした。

川端は大卒卒業後、伊豆湯ヶ島を拠点としていたが、一九二七年に杉並町馬橋（現・杉並区高円寺北）に移り、翌年、尾崎の誘いによって馬込文土村に転入した。川端は、尾崎家が開かれた文士の集りに参加することはなかったが、次第に尾崎が川端の家を訪ねて、交友を深めた。尾崎と川端の交友はいの創作意欲を高めるもので、自然に二人が中心となって馬込文土村の同人「十三人倶楽部」（後の「新興作家倶楽部」母体）や「没落時代」を結成した。

この頃、川端は南島町・白田坂で暮らしており、妻・秀子と一緒に愛犬の散歩を日課として、秀子は懐妊していたのだが、散歩の途中に転んでしまい、流産してしまった。一九二九年九月、川端は秀子の子を思っていたか、坂道の多い馬込から離れ、上野へ転居した。同じ頃、尾崎は宇野浩二（一八九七—一九六九）小説家中心となっていた人がいなくなることにより、十三人倶楽部の中心となっていた。尾崎と川端の交友も以後数年間疎絶された。しかし、一九三三年に尾崎の「山村書房」を発表すると、数年間交友が途絶えていた川端が同書を称賛し「ベストセラー」になった。以後、約十年に渡って尾崎は昭和を代表する小説家、一人として活動し、川端との交友は尾崎がこの世を去るまで続いた。このことから、尾崎にとって川端は、交流のあった馬込文土村の中でも別格の存在であったことがうかがえる。

主要参考文献

- ① 尾崎士郎 一八九四年—一九六四年 講談社
- ② 川端康成 作家の自伝十五 川端康成 一九四四年 日本書肆セナー
- ③ 小宮久義 尾崎士郎の生涯 実説人生劇場 一九七七年 自由出版
- ④ 小谷野敏 没落時代編 川端康成昭和年譜 二〇〇六年 朝風出版
- ⑤ 註
- ① 痛手止めして使っていた、そのモルヒネを服用するようになった。
- ② 小宮久義 尾崎士郎の生涯 実説人生劇場
- ③ 小宮久義 尾崎士郎の生涯 実説人生劇場
- ④ 小宮久義 尾崎士郎の生涯 実説人生劇場
- ⑤ 小宮久義 尾崎士郎の生涯 実説人生劇場